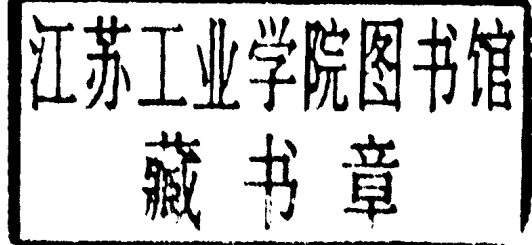


慣用句の意味と用法

宮 地 裕 編

慣用句の意味と用法

宮 地 裕 編



明 治 書 院

慣用句の意味と用法

昭和五十七年十月二十日 初版印刷
昭和五十七年十月二十五日 初版発行

編者 ◎ 宮 地 裕

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷

代表者 田 中 忠

発行所 株式会社 明治書院

東京都千代田区神田錦町一の一六

郵便番号 一〇一

電話 東京(二九)三七四一(代)
振替口座 東京三―四九九―番

はじめに

本書は、日常ごく普通に使う慣用句を、具体的文例にもとづいて解説したものである。項目の選択に当たっては後掲の「常用慣用句一覧」のもとになった「基本慣用句表」を参照したが、かならずしもこれにとらわれず、執筆者の自由な選定によっている。

「基本慣用句表」と仮に名づけたものは、日本の児童生徒の学習用国語辞典五種（小学校五・六年生から中学校一年生あたり用。三省堂『小学国語辞典』、旺文社『小学学習国語辞典』、講談社『新国語辞典』、小学館『学習国語辞典』、学習研究社『学習国語辞典』）に、親見出しまたは子見出しとして載っている慣用句をすべて拾って一覧したものである。ただし、格言・ことわざ・複合語と認められるものは除外するなど、慣用句の認定は筆者の判断によった。

これら五種の辞典の所収語彙は三万語前後だから、慣用句もかなり精選されていて、ごく普通のものと言うことができるので、仮に「基本慣用句」と称したけれども、これら以外に基本的な慣用句がないなどと言えるものではない。抛るべきものがないから、一つの資料としたにとどまるが、この「基本慣用句」と本書所収の慣用句とを合わせて、「常用慣用句一覧」と称し、参考資料として後掲した。「執筆者の自由な選定によっている」ものの、本書所収の慣用句は、三年間という比較的短期間のうちに、ある量以上の「文例」を拾うことのできたものであって、その点からごく普通に使われているものにはちがいないからである。

本書の例解項目の排列は句頭の五十音順とし、項目ごとの解説は、

文例 意味 文法 類義語句 参考

に分けてある。「参考」の中の外国語は、英語を最初に置き、以下ABC順に、中国語・フランス語・韓国語・タ

イ語となっている。また、「参考」のあとに「付説」を置いたものがある。

日本語という言語の単位体は、おおまかには、語・文・文章に三分されるが、こまかくは、語と文のあいだに句があり、文と文章のあいだに連文や段落があるなど、いくつもの単位体を立てることができる。慣用句は句の一種であって、日常生活においてよく使われるものが多い。日本語の学習上・研究上、重要なものであることは言うまでもないが、その調査・研究には未開拓なところが大きい。

一九七〇年代前半から「成句」の問題に関心を向けていた筆者は、一九七四年以来、少しずつ論文を書き、一九七九・八〇年度には、大阪大学大学院文学研究科の演習で、院生・研究生とともに慣用句の研究を行った。そのまゝとめは、それぞれの年度末に、『慣用句の研究(稿)』『増訂 慣用句の研究(稿)』として、少数数印刷刊行した。ついで八一年度には、その訂補・総括を行って、原稿のかたちにまとめあげ、さらに訂補を加えた。これが本書の草稿である。

したがって、総括・編著の責任は筆者にあるが、本書は筆者と院生・研究生たちとの共同作業によるものであり、共有の成果である。もとより、学界・教育界の、陰に陽にの恩恵を受けているものであり、たまたま一九七九・八〇年度には、文部省科学研究費を「慣用句・連語或句・複合助辞の研究」の題目のもとに受けたこともありがたかったし、前後して国立国語研究所の語彙・文法調査関係の既存のカードを検索する便宜を、宮島達夫・高橋太郎両氏はじめ数名の所員のかたがたから受けたこともありがたかった。

諸恩をこうむるわりには、はなはだ未熟のもので、研究上も、また利用者の便宜のためにも、ようやく第一歩を踏むものに過ぎないが、いささかなりとも日本語の研究・教育・学習上お役に立てばと思う。

一九八二(昭和五七)年九月

宮地 裕

目 次

はじめに 一

慣用句見出し一覧 五

慣用句例解 一

慣用句解説 三六

一 総 説 三六

(一) 慣用句の定義と分類 三六

(二) 慣用句の周辺の用法 四〇

二 品詞別の特徴 四二

(一) 動詞慣用句 四二

(二) 形容詞慣用句 四四

(三) 名詞慣用句 四五

三 語彙的な特徴 四七

(一) 身体語彙の慣用句 四七

(二) 心情語彙の慣用句 四八

(三) 漢語語彙の慣用句	二四九
(四) 洋語語彙の慣用句	二五〇
四 形式上の特徴	二五三
(一) 比喻形式の慣用句	二五三
(二) 否定形式の慣用句	二五四
(三) かさね形式の慣用句	二五六
五 形式上の制約から見た特徴	二五六
(一) 命令表現について	二五八
(二) 意志表現について	二五八
(三) 受身表現について	二五九
(四) 否定表現について	二五九
(五) 敬語表現について	二六〇
(六) 連体修飾の受けかたについて	二六〇
(七) 副詞の受けかたについて	二六三
常用慣用句一覧	二六七
索引	二六七
おわりに	二七三

慣用句見出し一覧

あ行

相 ^{あひだ} 槌を打つ	三
青くなる	四
あぐらをかく	六
あげ足を取る	七
揚げ足の果て	九
足が地 ^じ に着かない	一〇
足がすくむ	一二
足かせになる	一三
足並みをそろえる／足並みが	
そろう	一四
味もそっけもない	一六
足もとを見る	一七
足を洗う	一九
足を運ぶ	二〇

足を引っぱる	三
頭に来る	二四
あつけに取られる	二六
あとの祭り	二八
あの手この手	二九
息をのむ	三
一目置く	三三
一も二もなく	三三
うしろ指をさされる／うしろ	
指をさす	三三
うつつを抜かす	三六
海のものとも山のものともつ	
かない	三八
得 ^え 体が知れない	三九
襟 ^{えり} を正す	四〇
奥歯にものがはさまる	四三

か行

お茶を濁す	四三
思うつぼ	四四
折り紙をつける	四六
尾を引く	四七
音頭 ^{おんど} を取る	四八
顔が広い	五〇
顔をする	五一
影も形もない	五四
肩の荷が下りる／肩の荷を下	
ろす	五五
肩身が狭い	五六
金に糸目をつけない	五七
かぶとを脱ぐ	五八
気が気でない	六〇

気がする	六二
気がつく	六三
聞き耳を立てる	六四
氣に入る	六五
氣にする	六七
氣になる (一)	六八
氣になる (二)	七〇
肝に銘じる	七一
脚光を浴びる	七三
きりがない	七四
氣をつかう	七五
氣をつける	七七
くぎをさす	七八
口に合う	八〇
口にする	八三
口火を切る	八三
口をそろえる	八五
口をたたく	八六
首をかしげる	八七

下駄を預ける	八九
血相を變える	九〇
けりがつく／けりをつける	九一
幸か不幸か	九三
公算が大きい	九四
声をかける	九六
心当たりがある	九七
心が沈む	九八
心を奪う	九九
小耳にはさむ	一〇〇

さ行

采配をふるう	一〇三
さじを投げる	一〇三
舌つづみを打つ	一〇五
下にも置かない	一〇六
舌を巻く	一〇七
地団駄を踏む	一〇九
しのぎを削る	一一〇

しゃくにさわる	一一三
状態におちいる	一一四
白い目で見る	一一六
相好をくずす	一二七
袖にする	一二八

た行

太鼓判を押す	一二〇
たかをくくる	一二三
駄々をこねる	一二三
立つ瀬がない	一二三
棚に上げる	一二五
血がかよう	一二六
血がにじむ(よう)	一二七
血の氣が引く	一二八
血道をあげる	一三〇
血も涙もない	一三一
宙に浮く	一三四
つじつまが合う	一三四

テロ入れ(を)する……………一五五

手にする……………一三七

手も足も出ない……………一三八

手を打つ (一)……………一三九

手を打つ (二)……………一四〇

手を焼く……………一四二

とどめをさす……………一四三

途方とほうにくれる……………一四四

とりこになる……………一四六

とりつく島がない……………一四七

な行

長い目で見る……………一五〇

波に乗る……………一五二

なりふりかまわない……………一五三

難色を示す……………一五四

二の足を踏む……………一五五

猫も杓子やうしも……………一五七

根も葉もない……………一五七

念を押す……………一五九

は行

歯が浮く……………一六〇

歯切れが悪い……………一六一

歯止めをかける／歯止めがか

かる……………一六三

鼻をあかす……………一六三

齒に衣きぬを着せない……………一六四

羽目になる……………一六六

腹が立つ／腹を立てる……………一六七

腹がへる……………一六八

腹をきめる……………一六九

一役ひとやく買う……………一七〇

人を食う……………一七三

日の目を見る……………一七三

火花を散らす……………一七五

氷山の一角いっかく……………一七六

ひんしゆくを買う……………一七七

腑に落ちない……………一七八

ブレーキがかかる／ブレーキ

をかける……………一八〇

棒に振る……………一八一

ま行

身がはいる／身を入れる……………一八三

水に流す……………一八四

水をあげる……………一八五

水をさす……………一八六

身につく／身につける……………一八七

身の置きどころがない……………一八九

身の毛もよだつ……………一九〇

耳にする……………一九二

耳にはいる……………一九三

耳を貸す……………一九四

耳を傾ける……………一九六

耳を澄ます……………一九八

身も蓋ふたもない……………一九九

見るかげもない……………	三〇〇
身を粉にする……………	三〇一
胸がつぶれる……………	三〇二
目がない (一)……………	三〇三
目がない (二)……………	三〇五
目くじらを立てる……………	三〇五
メスを入れる……………	三〇七
目途がつく／目途をつける……………	三〇八
目にあう……………	三〇〇
目に浮かぶ……………	三一一
目にする……………	三一二

目につく……………	三一二
目にとまる……………	三一二
目にはいる……………	三一二
目に見えて……………	三一二
目のかたきにする……………	三二八
メリハリがきく……………	三二九
目を落とす……………	三三〇
目をつける……………	三三二
目をつぶる……………	三三三
目を見る……………	三三四
目をやる……………	三三六

もとも子もない……………	三三七
もとを取る……………	三三八
ものを言う……………	三三九
ものを言わせる……………	三三二

や・ら行

役割を果たす……………	三三三
矢も盾もたまらない……………	三三四
埒があく／埒があかない……………	三三五

慣用句例解

あ行

相槌あいづちを打つ

【文例】

① ひどく熱心に人形芝居を讃美するものだから、つい老人を喜ばすつもりで相槌を打つて……『夢喰う虫』谷崎潤一郎一九二九

② もしジャズの話をしていたらジャズの話をし、映画の話をしていたら映画の話に相づちを打てばいいのに、ぼくなんかはそうでなくてただ自分だけいばっていたのですからね。『平和』一九五四・六国語研カード

③ 「ソーモンの唄か」とガシンは相槌を打つたが、何のことがさっぱりわからなかった。『樵の木祭り』高城修三一九七七

④ 相槌を打ちながら伸子はうわの空になっていた。『伸子』高橋契一郎一九七八

⑤ 「……俺は俺一人でも立派な警察官になって故郷へ錦を飾ってみせるぞー」と言う声に勢を得て「そうよ、そうよ、さあみんな褒ようじゃないか」「くよくよするな、頭がはげらあー」とあいづちをうつように笑い声などとして……『人生手帖』

一九五三・一二国語研カード

【意味】 対話場面で、相手の言うことに賛同して答えたり、う

なすいたりして、調子を合わせる。本当に賛意を持ているかどうかは問わない。相手との対立をあからさまにしない程度に調子を合わせることもあり、対話での一種の儀礼的応答にすぎないこともある。

【文法】 文型「ダレダレがダレダレ（の話・言葉に）——」。

活用形はさまざまにありうるが、受身形は一般に迷惑の意となる。

【類義語】 「調子を合わせる」。相手の気に入るように話や態度をあわせる。さからわないようにする意で、「合わせる」対象は、話や言葉のほか、相手の意図や考え方などを含む。これに対し「相槌を打つ」は具体的な場で、相手の言葉に同調することをする。

【参考】 英語には to chime in (with) と to echo (another's words) (『研』) がある。前者は、「相槌を打つ」のほか、「話に割りこむ」「口を出す」「歌などで、調子を合わせて加わっていく」意である。後者は、話している者をまねして後から言う、「相槌をうつ」意。なお、to chime in の場合は自分もその意見や考え方を持つが、to echo の場合は自分はいくぶん考えていない、他の人の言ったことをいい返しているだけという感じがする。

to follow suit も上記の句に近いが、これは意見とか考えとか動作とかで参加する意味。ほかに、to fall in with (everything another says): to give one the green light もある。to fall in ~

の場合は、to chime in (with) がいっしょけんめい自分の意見を加えてやるのと違って、ただ相手の発言に何でも賛意を示す。to give one the green light は相手の立てた計画を許すという語感がある。

中国語で「随声附和」という。相手の話に調子を合わせて受け答えしたり、うなずいたりするという意である。また「帮腔」「打帮腔」という言い方があるが、もともとは一人が歌い終わってあとに大勢が附和して歌うという芝居の形式を指したもので、転じて他人を支持し、他人の話に加勢するのに譬えられる。マイナス表現である。

フランス語 フランス人は相槌を打つという応答のしぐさはない。「相槌を打つ」という慣用句もない。

韓国語で「맞장子를 치다」(mate-guri e'ida) という。直訳で「あい太鼓をうつ」の意味。相手の言動に調子をあわせることであり、それによって多少へつらう気持ちも加味される。

タイ語で、相手の話を聞いている時、/mum-/ /so-/ /ho-/ などと相槌もうつが、「相槌をうつ」という慣用句にびつたり当てはまる表現はなかなか見当たらない。一番近いのはおそらく「88」という動詞であろう。この動詞は、たいてい、相手の言葉に賛意を表す場合に用いられる。また、実は賛意を持っていないが、その場の相手の話に反対したり中断したりしたくないから、一応賛成するように見せる場合にも用いられる。

【付録】 鍛冶で相手とかわるがわる槌を打ち合うこと。「あい」

は「間(あい)」で、焼いた鋼材を師匠が打つその「あい」に、弟子が槌を入れるところから来たと言われる。

青くなる

【文例】

①何かまだひっかかっている気がされて安吉は出たとこで立ち止まった。顔があおくなるのがわかった。大しじりの可能性が考えられる。(『むらぎも』中野重治一九五四)

②声をかけられて、やむを得ず彼女は立ちあがった。良人の名前にも、吉沢の名前にも、丸印をつけてはなかった。彼女は顔が青くなっているような気がした。委員長選挙に彼女は白紙投票をしたのだった。(『人間の聲』石川達三一九五九)

③槓子は、黙ったまま棒立ちになっていた。指先がふるえてきた。自分でも顔が蒼くなってゆくのが分った。(『ゼロの焦点』松本清張一九六〇)

④意外なことの成りゆきに青くなって反駁したんですが、ヒュームのおっさん、いっさい耳を貸そうとはしません。(『新西洋事情』深田祐介一九七五)

⑤「いや。僕はこの母とは、もうすっかり縁を切って居ります」と僕は切口上で言った。「だから工場長とも、赤の他人です」「何を言うの、信太郎……」と母が青くなって僕に言った。

【僕たちの失敗】石川達三一九六一

【語源】

困った事態に直面したとき、恐れや緊張や不安のため

に顔色がかわる様子を指す。「顔が青くなる」は実際の顔色の变化を表す場合が多いが、「青くなる」はより抽象的、比喩的な表現で、「こわくなる」や「不安になる」に近い意味をもつ。

【文法】 文型「ダレダレの顔が——」。「ダレダレが——」。

使役・受身・可能・意志・命令形は一般に用いられない。

【類義語句】 「青さめる」「(顔面)蒼白になる」「青い顔をする」「青い顔になる」「顔から血の気がひく」「顔色がかわる」

例……特二の窓から見せている嫂の顔は放心したように、蒼さめて無表情だった。(『ゼロの焦点』松本清張一九六〇)

例警官もふたりのわかい追跡者も、息づまるような緊張のため蒼白になっていた。(『積木の塔』鮎川哲也一九六六)

例「……あわてて、おれが火を止めたけれど、炊事場は、煙でいっぱいさ。火事になるところだったぞ。卵をゆでようとしたのは、おまえだろう。」

知子は、返事もできず、青い顔をして目をばちばちさせていた。(『中二』「視野を広げる」)

例そこで母はあまりにも不吉なことを口にしたと気付き、言葉の、青い顔になった。(『箱庭』三浦朱門一九六七)

例アンドレ修道女はユリ・テレーズの手をふりはらうと、いきなり椅子から立ちあがった。その顔からは血の気がひいて、眼が錯乱したように輝き、両手はふるえながら、何か眼の前ものを捉えようとするように差しだされた。(『北の岬』辻邦生一九六六)

特に、語感を強める場合には、「(顔が)真っ青になる」「真っ青な顔をする」という。

例背後のシートに、やはり真蒼になったわかい女が、これはいまでも気絶しそうにハンドバッグを握りしめていた。(『積木の塔』鮎川哲也一九六六)

【参考】 英語では to turn pale, blanch (白くなる) (『研』) という。さらに「to turn white as a sheet (……ほど真白になる)」がある。これは「ぞっとする」と同じくらい驚いている時に使う。

中国語で「臉色發白」(顔色が白くなる)という。

フランス語で「est bien (または vert) de peur」(心配のあまり顔が青くなっている意)。

韓国語で「(얼굴이) 새파랗게 질리다」(alguni separekhe chilla)、「(얼굴이) 새파랗게 질리다」(alguni separekhe chilla)、「노래지다」(alguni norechida)という。前者の二つは「(顔が)真っ青になる」で、後者は直訳すれば「顔が黄色くなる」である。両者共にひどく驚いたことに対してのたとえであるが、前者は「恐怖」「恐れ」に関して言い、後者は恐れだけでなく、急な出来事に接してがっかりし、それでびっくりするという感じである。

タイ語では、nāa siid という。顔に血の気がない様子を、nāa siid nūan krādat (白い) 紙のように顔の色があせた、nāa siid mūan khāi tōm (ゆで卵のように顔の色があせた) と

いう比喩的表現がよく使われる。

なお、タイ語では、色を利用して顔の表情と結びつけて使われる表現がいくつかある。驚いた時には、「顔の色が青く(白くなる)」というが怒る場合には、「顔の色が青く(Blue)なる」とか、「黒くなったり赤くなったりする」とかいう。日本語のそのような表現はタイ語より少ないようだ。(頭に来る)の項参照)

あぐらをかく

【文例】 ①政権の座にアグラをかき、権力を悪用したわいろが横行し、(『朝日・朝』一九七九・七・二七)

②血税にあぐらをかく官公労働者の思い上がり(『朝日・朝』一九八〇・七・一八)

③自民党は二十五年間の遺産にあぐらをかくだけで、保守政治の理念を持っていないように見えます。(『朝日・朝』一九八〇・一一・二八)

④与党の安定多数にアグラをかいて予算もらくらく通し、(『朝日・朝』一九七九・八・二二)

⑤市民社会からまかされた特権にあぐらをかき、責任感が弱くなっていないか。(『朝日・朝』一九八〇・一一・一八)

⑥当人はもとより、その仲間どもの指手、ばか笑い……権力にあぐらをかき、国民をなめきった政治屋たちの愚劣なショー以

外の何物でもなかった。(『朝日・朝』一九七九・五・二九)

⑦オリンピックの栄光にあぐらをかくことをきらい、(『朝日・朝』一九八〇・六・二五)

⑧王や長島ら一部スターによって支えられた人気にあぐらをかいて、プロ野球は経営上でも甘えていたと思う。(『朝日・朝』一九八〇・一一・六)

⑨権威のうえにあぐらをかいて、(『朝日・朝』一九八〇・四・二八)

⑩安定多数の上にあぐらをかき、調子に乗りすぎると次回の選挙で必ずしつべ返しがくる。(『朝日・朝』一九八〇・六・二四)

⑪野党の無力の上にあぐらをかいた行為(『朝日・朝』一九七九・一一・一三)

⑫長い間あぐらをかいていた自民党に反省を促し、(『朝日・朝』一九八〇・五・三一)

【意味】 あるものの上にドカッとすわって、ずうずうしくかまえる。現在の地位・立場を利用(悪用)して、他者の迷惑をかえりみず、いい気になっている意。他者に対する批判的なニュアンスをもつ。

【文法】 文型「ダレダレがナニナニに——」。

ナニナニは「座・権力・特権・栄光・人気・上」などである。

⑨⑩のように「ナニナニの上に」となることがある。これは「の上」がなくてもかわりはない。④と⑩、⑤⑥と⑨を比べ